

現代歌人文庫『佐佐木幸綱歌集』（一九七七年刊）所収。そして『佐佐木幸綱の世界』第十六巻に採録しています。

新庄嘉章（1904-97）先生が顧問だった。早稲田のフランス文学の教授で『ジャン・クリストフ』の翻訳で有名な人でした。いつも編集会の終わり近くにやってきて、「そろそろ会議の場所を移そう」と言って新宿に連れて行かれる。「茉莉花」等の文壇バーで飲ませてくれるんです。

加古 新庄さんは酒癖があまりよくなかったという話も聞きました。

幸綱 「早稲田文学」ではまったく悪い印象はないです。酒は好きだったですね。

加古 泥酔して木山捷平と握手をして、木山さんの手の薬指の骨を折ってしまったそうです。

黒岩 それはすごいねえ。

加古 それなのに木山さんに謝るところか、新庄さんは「また売文のネタが一つ増えたじゃないか。それを随筆に書いて、その原稿料で温泉にでも行って来い」と暴言を吐いちやった。それで、木山さんは怒って、新聞や小説に事の顛末を書いた。ま、確かに結果的には売文のネタになったという話なんですけど（笑）。

幸綱 当時の新庄さんは温厚な飲み方だったな。同じく仏文の『カザノヴァ回想録』の翻訳をされた窪田般弥さんともども、親しくしてもらいました。

編集室は四谷のマンシヨンの一室を借りていて、二十畳くらいのリビングを編集室にしていました。風呂場に本がいつぱい積んであったな。そこに六、七人が集まる。トリスだったかサントリーの安いのが三本置いてあって、飲みながら先の号の目次を作る。新人の原稿、持ち込みの諸説を読んできて批評する。文壇のニュースを交換する。二時間くらい仕事をするうちに、ウイスキーがなくなる。新庄先生があらわれる。「じゃ、新宿へ行こうか」って（笑）。そういう編集会でした。

大野 「早稲田文学」を知らない者のためにお聞きしたいのですが、早稲田の学生ではなくて、早稲田関係者が出していた総合文芸誌ですか。

幸綱 いやいや。早稲田関係者が多いけど、独立していたよ。僕らの次の第八次だったかなあ、早稲田に関係のない中上健次が編集委員になっっているよ。

黒岩 文芸雑誌ですね。

加古 毎月出してましたね。

幸綱 当時は毎月。今は季刊です。

黒岩 今は大判ですね。

大野 先生が企画されたので印象的なのは何でしょうか。

幸綱 個人でどうというのはなかった。話し合いです。

加古 ただ、昭和四十九（一九七四）年七月号から九月号の第七次「早稲田文学」は幸綱先生が編集を担当されています。

幸綱 森部信次君の小説を載せたな。

加古 そうなんです。それを見てびっくりしました。八月号に「貸借関係」という小説が載っていて、作者は「森部信」とあります。「心の花」の森部信次さんです。

高山 東京歌会の森部さん。

黒岩 エーッ、そうなんだ！

加古 最初に担当されたとき、七月号の巻頭は坪野哲久さんの短歌で、次の八月号が金子兜太さんの俳句、九月号が清水哲男さんの詩「スピーチ・バルーン」ふしぎな国のブツチャー」。

幸綱 少し詩歌を載せようということになったんですね。

加古 あと、馬場あき子さんが坂東玉三郎を描いた文章、「眼 凄婉な花」や、李禹煥さんの文章、「在日朝鮮人文学における